

明治三十三年二月二十六日 禮拜日 信省認可

明治三十三年六月一日 發行



目次

目次

社説

◎教界の最大急務

論説

◎宗教家事業の範圍 文學士 秦敏之

◎慈善事業の動機 永井壽江

社會

◎思想界の動搖◎修養◎新聞紙と罪惡◎

◎外人の教育思想◎奇僧◎時間の嚴守◎師

範學校の増設科目

雜録

◎北遊襟記 文學士 本多高陽

◎雲水雜記 在大學 久保猪之吉

信界

◎満足の心 文學士 壽澤瀧之

會報

◎會頭久我侯爵九州巡回記事◎津中前豊 津中前豊

井二茶話會 扇城女學校

改教時報

第三十二號

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を奨励し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、政教問題を研究して、政府をして公認教制度を立てしむる事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奨励して、善良なる家庭を形作らしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を奨励する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政教時報

教界の最大急務

宗教問題は、最近我邦に於て最も流行問題の一なるべし、學理的的研究上より立論するもの、活ける信仰を吹き込まんと論ずるもの、宗教革新の上にて於て意見を立つるもの、社會問題實行を急ぐ者、將た又之を政治上より云爲するもの等、一々枚舉し來れば、僕を替ふるも猶能はざるを恨む、然り眞個に教界は多事多忙の秋なり、世人は我佛教より活ける信仰を得て魂の歸着を定めんと待ち設けつゝあるなり、社會は我佛教家が慈悲の眼を以て世相を觀じて救済の手を伸さんことを要求しつゝあるなり、何人も弊害多き舊佛教界の改革せらるべく生命ある光輝ある新佛教の興起せらるべきを豫想して之を翹望しつゝあるなり、嗚呼今の宗教家は千載の一時に遭遇せるなり、此機運に乗じて此興望に投じて、至誠以て宗教の爲め盡さんと欲する者あらば世人は篋食孤誓して歡迎するに吝ならざるなり、夫然り機運已に斯くの如くなるを以て、假令驚天動地の大事業を爲すは不世出の偉人を須たざるべからずとすも、空前の大革新を實行せんとするには曠世の大手腕を要するも、斯る偉人傑士を須たすして成し得べきの事業は決して妙しとせざるなり、誠意と忍耐とにあらば常人中才にても成功し得べき事業は到る處に充滿し居るを見るな

政教時報第三十一號目次

社説 讀史所感(中)

論說 感化法發布に就ての所感◎慈善問題

を論じて感化院設立の位置に及ぶ

社會 千秋萬歲等

雜誌 窮兒惡化の狀況

會報 九州巡回記事

本誌廣告

一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす

一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず

一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事

一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事

一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十三年五月卅一日印刷

明治三十三年六月一日發行

發行兼編輯人 印 上村幸三郎

清水朝太郎

り、悲い哉今の佛教界には此常人中才すら缺乏に缺乏して世人の要求に應ずる能はざるなり、今の教界缺乏を感ずるもの多しと雖も未だ人物の缺乏甚しきはあらざるなり、何事を爲さんとするにも先づ缺乏を感ずる者は相當の人物を得るの點に在り、着手だに爲さば必ず世人の賛成を得べくして資金の如きも容易にはあらざるを得べからざるにあらざる事業を眼前に控へながら、涙を吞で手を控へ居らざるべからざるは他なし、人物無きが爲なり、人物の缺乏は實に終世の恨事に屬す、

余輩は非凡の大頭腦大手腕を有する偉人を望まざるにあらざると雖も斯る偉人は望んで得べきにあらざり、養て成すべきにあらざれば、暫く論外として、常人中才を得んと欲して得る能はずといふも十萬の僧侶諸氏を指して常識だに缺損せる痴呆漢なりといふにあらざり、彼等は皆健全なる常識を具有せる事は勿論、才學も中流に位し得るや明なり、然れども其才學や其思想や、頗る舊模型にして、多くは我進歩せる社會の形式に當て箱らざるなり、唯識三年俱舍八年の教育を受けたる學者、張り付け法談のせり込に翁祖を感泣せしむる事を得意とせる説教者、讀經と引導とに妙なるを誇り居る住職等は何れも進歩社會の要求に適合せざるを奈何せん、之れ決して個人を咎むべからず、今人のみを責むべからず、徳川幕府中葉以來國學者儒學者等頻りに佛教を排斥し、遂に明治維新の際に至て彼等得意の頂上に達し切に廢佛毀釋の實行に着手せる等、僧家を驚駭せしめし事多々にして、狼狽の間に世人の進歩に

後れしも一因なるべし、又醫書埋學書などは已に久しく世人の研究を許せしむ、かの宗教書は實に明治年間迄は全く繙讀を嚴禁せられ居りしかば西洋思想は我宗教者間に遅く入り始めしも佛敎家が世人の進歩に後れし一原因なるべし

原因は兎もあれ今日佛敎家が一般に世の進歩に後れ居るは事實なり、而して何とて進歩に立ち後れ居らざる如く世間體を裝はんと外見を飾るに煩悶苦慮し居るは佛敎家目下の状態なり、其狀恰も年弱き男女が借金して衣服調度の流行を追ひつゝあるに異ならざるなり、其行末の覺束なきは敢て智者を俟たずして知るべきあり、余輩は切に勸告せんとするものあり、今にして從來の矯飾主義外見政略を止めて専心著實に人才養成に従事せん事是なり、余輩が呼んで最大急務と稱する者即此敎育を盛にするより外なきなり、各宗本山の當路者も敎育の大切なる事はよく知らざるにあらざるべし、されば力の及ぶ丈は已に此事業に盡力しつゝあるべしと雖も、余輩の見る所を以てすれば、其力の入れ様至て少くして、是亦他の事業と同じく御附合的裝飾品に過ぎざるの觀あり、請ふ少しく各宗の敎育事業を解剖せしめよ、

現今勢力ある宗派といへば先づ指を眞宗、曹洞、眞言の三派に屈す、眞宗中殊に東西本願寺を大ありとす、而して其設立にかゝる學校も他宗に比して稍見ゆるべきものありと稱せらる、然れども其敎育費として支出する所は余輩之を詳にせずと雖も、恐くは僅に全歳出の二割内外に過ぎざるべし、抑各宗本山が本務として勵まざるべからざる事は唯布敎と勸學との

二途あるのみ、而して布敎に於ては其一半は未寺僧侶及び他の居士信徒等にて負擔すべければ、本山として全責任を負ふて力を盡すべきは敎育の一點に存すべきなり、平生に在りて猶然り、況や現今の如く人物拂底の時に於てをや、然るに僅々全歳出の二割を以て敎育費に充つ、其敎育を重せざるや知るべきのみ、又見よかの兩本願寺の學制は變更又變更、變更の速なることは當に狙公の朝三暮四のみからざるなり、一變更毎に些の進歩改良の點を見るあらば變更敢て惡しきにあらずと雖も、多くは學生に年月を損失せしむるのみにして學制上には些の進歩を見出し能はず唯往きつ戻りつするに外ならざるなり、畢竟するに是深く根本的研究を遂げずして、僅に官公立の學校に模倣するか、或は他宗の同種類學校に參酌する位の事に過ぎざれば、隨て改むれば隨て不便不利の點を生ずればなり、豈不親切の至りならずや、斯る次第あれば好學の子弟も猶各宗本山の設立せる學校に入るを好まざる者も多く、夫等の學校に在る者若くは卒業せる者も眞實護法の精神ある者少く、却て其本山を罵嘲するを以て快事となす者多きなり、罪は孰れに在りとするも、兩者共に不利益は免れ能はざるなり、不利益は猶忍ぶべし、共に其職責を盡し能はざるを奈何せん、

敎育を爲す、固より衆生徒を一樣の模型に鑄込む如き方針を取らざらざるべし、而かも佛敎者の設立にかゝる學校には何とて佛敎家らしとか、或は今後宗教に對する覺悟とか、何歟一特色のあらんことを望まざるべからず、畧一定せる大方針

の具はらん事を求めざるを得ず、余輩の言なるか豊せるか、斯の方針特色の有りと云ふなる佛敎學校は未だ見る能はず聞く能はざるを悲む、堂々たる外觀頗る完備せる學校なりとも其内容を審査し來れば、校長にも敎職員にも、樂んで一宗の子弟敎育を以て自ら任じ、第二世紀の立派なる佛敎者を仕立て上げて大法を護持せしめんとの親切もなく、見識も無く、唯其校長たり敎職員たるを榮譽として其位置に戀々たるものか、若くは其職に在るを煩累として一日も早く遁れんと欲するも義務上能はずして何事も唯放任し置くものにあらずんば、他より雇ひ入れたる敎師のみ、若し又生徒に付て言へば其内心は他の官公立學校に入學せんことを希望すれども父兄の言、信徒の意向共に背き難くして止むを得ず在學すといふ者随分多數を占め居るといふ有様なきか、佛敎學校の狀態敎育者も被敎育者も已に斯の如きものありとせば、眞に心ある者は憂ふべきにあらずや、論じ來れば所詮敎家の最大急務は敎育振興策にあらずや、請ふ次號に於て少しく所見を開陳せん。

(未完)

論說

宗教家事業の範圍

秦敏之

宗教家の事業の範圍は有限なりや、將た無限なりや、昔し釋尊が印度に於ける一代の事業を考へ來れば、その説く所の法

門は種々雑多なりきと雖、其行跡は甚だ簡單にして、只衆徒を集めて法を説き、靜座に處して座禪を凝し、處々に巡化して食を求められたることあるのみ、爾來久しき間此流を汲みたる僧侶は、印度、支那、中央亞細亞、朝鮮、暹羅、日本の何れを問はず、成るべく釋尊一代の行跡を學ばんことを欲し、座禪、念佛を以て己れの修養に對する根本要義となし、傳道心あるものは釋尊の敎を敷演して、其徒衆に開かしめ、又之を書に著はすことを以て畢生の目的となせり而して時下り、世移るに隨ひ、病院を建て、貧民を救ひ、道路を通じ、一般公衆に説法する等のこと大に興り佛敎僧侶、若くは佛敎信徒としては斯の如き公共慈善の事業は方の許さん限り勉むべきものなりとの觀念一般に浸潤したとて座禪觀念を疎かにするも、慈善公共のことに従ふは即ち佛道修行を爲すものなりとの感念起り、此に宗教家の事業なるものは其範圍を擴め、其生活の狀態も亦決して一樣に非ず、只其才能に従つて、社會公共のことに従ふことあるも將た自修觀念に時を消費するも何れも善良なる佛敎信者として毫も本領を失ひたるものに非ずと信せらるゝに至れり、即ち日本に於て眞宗の如き一種の俗諦宗を容るしたる所以にして、眞宗の興起と共に、佛敎は大に世俗に接近し、隨て一種の弊害をも醸したりと雖、又一般公衆に宗教の味ひを知らしめ、兎に角一文不知の野蠻人民を化育して、容易に善惡の區別を鑑識せしめ、慈悲仁愛の精神を養成し得たる其効蹟に至りては千古磨滅すべからざるものあり眞宗が今日に於ける隆盛は、全く俗と接近して其蒙昧

を開拓したるの結果にして、所謂世の文明に利益する所多かりければなり、

一流の佛教僧侶は曰く、佛教の本領は世人に精神上の安慰を興ふるにあり、その言行が果して文明の進歩に伴へるや否やを顧みるを要せず、その言行が文明の進歩と一致すれば幸なり、然れども敢て汲として之と一致せんとを求むるを要せずと、蓋し其心底には世に所謂文明なるものは、誠に浮薄輕躁の徒輩が外觀の美を眩ふの道具なりとの輕蔑心ありて此語を發するものなれば、その見識たるや高尚にして、而も此等の言辭が往々人世の煩悶を脱却し得たる品行方正なる僧侶の口より發せらるゝことあるが故に、予は敢て之を輕蔑すること能はずと雖、その言語の中には眞理あると共に又甚だ正中を失へる極端なる議論あることを認むるなり、成程僻閑なる書窓に伏居して、塵界の有様を觀察し、慈善よ、社會問題よ、交際よ、新發明よ、文明よ、などして實は漠然たる思想に支配せられて汲々として働けるものを見るべきは、随分塵世は馬鹿らしきものなりとの感覺も起らざるに非ざれども、又何事をも爲さずして超然と澄まし込み、學者よ、道德家よ、廉直家よあどして同じく塵世の階段中に繰込まれたることを忘れ、己れ一人は人間の域を脱したるが如く考へ居るものもその馬鹿らしさに至りては同一なり、要するに人世に於ては眞理非眞理の區別など容易に明言し得るものに非ざるが故に、佛教僧侶若くは佛教信者たるものは、佛教に於て善事と説き眞理と説けるものにして、全く己れの思想に投合敬服する所

あれば、猶豫なく之を斷行し、同時に世人が文明の事業なりとて喋々することあるを聞くときは、虚心平氣を以て此問題に注意し、先づよき事業なりと思ひたることは、他人に劣らず、此事業に着手すること肝要なるべし、又世の中に文明と稱することも、決して何種の事業が文明の事業であるといふ制限なきことなれば、新たに自から事業を計畫して、此事にして世の進歩を助くるものなりと思はば、他の批評に頓着せず、速かに之を斷行すべし、即ち無碍圓融の妙理は却て此間に其一端を窺ひ得ることもあるべし、

右の如く考ふるときは、佛教家たるものと雖、一概に其事業を一定の範圍に限ることを要せず、如何なる事業にても、世の進歩に伴ふことなりと思はば遠慮なく之に着手して毫も耻かしきとわらざるべし、近來世の中に多く行はるゝ議論を聞くに、宗教家の直接なる事業は説法なり、間接なる事業は、教育慈善若くは社會事業なりとし、僧侶たるものも是等の事業に従ふものは、誠に宗教家相當の仕事なりとして怪しまずと雖、其他の事業に従ふものあるときは、最早宗教に關係なき仕事を爲し、又宗教心なきもの、如く見做して他人扱ひを爲すの風あり、併し乍ら佛教僧侶若くは佛教信者たるものが諸種の事業に着手して、確實なる基礎を社會に立つることを得ば、是れ即ち佛教が社會に活動せるものに非ずや、然るに今日の佛教青年僧侶の因循姑息なることは、到老僧輩にも劣り、何々の事業に着手しては殊勝らしく見えず、寺を飛び出しては門徒の輿望にうむく、一事業を企てんとすれば、先づ

世間の評判如何を慮り、支那臺灣に布教すべきは必要なれども、瘴病の氣ありて行くべからず、自から此事業を好めども先輩の批難あるべしなど、實に狹隘薄弱なる思想に驅られて、優柔不斷の境に彷徨す、予は佛教今日の不振は品行なる老僧連よりも、品行方正にして而も活氣なき青年僧侶の責に歸するを躊躇せざるなり、

予は斷言す、世界百般の事業、皆是れ宗教家が銳意熱心を以て着手すべものなり甲の事業を以て宗教的とし、乙の事業を以て非宗教的となすが如き、是れ大勢に通せざる凡庸者の言、若夫れ乙事業を以て非宗教的となし得べくんば甲事業を目して又非宗教的と稱するを得べし、哲學的の立論は容易に甲をして乙たらしむべく、乙をして甲たらしむべし、而も今日に於て要なき所、只宗教家が、その事業の範圍を擴張して大に世俗と接近せんことを勉むるは是れ今日の急務に非ざるか

慈善事業の動機

永井 濤江

近來は社會問題とか、慈善事業とか言ふ文字は殆んど一の流行語となりて、都も鄙も皆此語を口にせぬものはない様になつて來た、世の所謂有志者と稱する人達は、尤も多く之を唱道する様であるが、今日に在りては此語は一種神聖な意味を有つて居る様に思はるゝので、慈善事業でも云へば如何なる敗徳漢が唱へ出したにせよ、眞向から反對することはチヨット出來ないと云ふ様な勢になつて居る、社會の爲めとか慈善事業とか言へば、如何にも好辭柄で名分が正しいもんであ

るから、反對の出來ないのは無理もない、且つ如何なる敗徳漢が企てたにせよ、其事業が眞實社會の爲めに企てられたものならば、敢て反對するにも及ばない様にも思はれる、併しながら、慈善事業もやり様によつては取りかへしのつかぬ害毒を社會に流すとが往々ある。

慈善事業を起すには色々の動機があるであらう、或ものは名を慈善事業に藉りて、實は自家の財囊を肥やさうとするものもある、又或るものは利益には望みはないが、之によりて慈善家といふ、名譽を博さうとするものもある中には又名利の念は更になが、社會の狀態坐視するに忍びず、止を得ずして起つて斯業に従事する人もある此等は眞に慈善事業の必要を感じたので前二者の如きは眞に其必要を感じた人とは言はれない、こんな人達に慈善事業を企られた日には、それこそ國家民人は難有迷惑至極であるが、眞の慈善家即止を得ずして起つて斯業に従事する人にては、單なる熱心のみであつては誠に危ふない、此熱心なる慈善心に伴ふて、是非冷靜なる判斷力がなければならぬ、若し冷靜なる判斷力がなくして、單に熱心なる慈善心のみであつた日には、實に怖るべき害毒を世に流すことが少くない、西洋はさすが慈善問題の老家であるが、慈善家も多しことであるが、英國の或る貴女が途中で一人の乞食に逢ふて、其者は大地に手をついて「難澁者が助かります、ドウゾ一文やつて下さい、アナタの御慈悲で眼前に横はる苦難を免れます、ドウゾ一文やつて下さい」と、泣つわめきつ哀訴するから、貴女は衣囊を捜ぐつていく

らか興へて、サテ問ふた、「御前は斯くして施しを受ければ、さういふ難儀から救はるゝことが出来るのであるか」と、實意をこめて問ふたら、乞食はわざと笑ふて、「今日、働かねばならぬと云ふ難儀から救はれます」と答へたと云ふ話がある(タラック氏行刑新論)、此等は慈善には違ひはなからふけれども、寧ろ害ありて利のないやりかたである、之と同様なもので若し慈善事業を一の流行物視し、徒らに熱中するのみで冷静なる判断考察をかけたならば、此笑ふべく忌むべき結果に陥らぬかと、特り余輩の杞憂のみではなからう。

政教時報第二十七號に、感化法案の發布に就いて「全國佛教徒諸君に警告す」と云ふ一文が附録としてあつた、全國の佛教徒が之を讀んで奮起し、報佛恩の業として、感化事業なり免囚保護事業なりに従來するに到らんことは、余輩の均しく希望する所であるが、唯憂ふるのは徒らに時流に投じて熱中し、冷静なる判断に訴へぬのである、例へば感化法案には一私人又は宗教團體等の事業として、感化院様のものが設立されてある場合には之を以て代用することがあると云ふてある所から、是非佛教者の事業として感化院を起し、佛教者が爲す所の證據を政府に示さずはなるまいと、か基督教徒が疾くに感化事業に従事して居るから、佛教者も黙まつては居れまいと、又は何所々々には已に感化院が起つたから我地方の有志者も奮起せざるまいなどと、要らぬ所に力を入れて、必要もないのに強ひて感化院を起すものなどがあつたら、悪少年を感化する所でない、却りて獎勵する様な反對の結果を來

すの虞がある、固よりこんな動機で起つた感化院があるとするれば、うんなものに感化の能力があるべき筈もないは當然である、そこで感化院を起すもよいが徒らに時流を逐はないで、冷静なる頭腦で判断するのが必要である、老婆心かは知らぬが余輩の憂ふる所を一言したのである。

社 會

◎思想界の動搖 時勢は進歩せりと云ひ社會は發達したりと云ふ、之を維新前に較すれば固より論なきのみ、而も其發達したるものは果して吾人の理想に適すべきや、其進歩や國家に弊害を貽すことなきや否や、吾人は既往に徴し現在に稽へ聊か疑なき能はず、進歩と云ひ發達と云ひ皆共に其名美にして何人も之を望まざるはなし、而も名の美にして却りて實の之に副はざることを吾人の屢々實驗する所なり、泰西諸國は何れも先進を以て任じ進歩發達を以て誇るもの、吾國の今日ある此等先進國に負ふ所尠しとせざるなり、已に文明國と云ふ、其名甚だ美にして誰れか裏面に幾多弊害の伏在するあるを思はんや、地隔千里、東西相距り人情を異にし、風俗を異にし言語習慣を同せず、國體并に政體も相同じからざる外國百般の文物を採來りて悉く之を我國に植移せむとす國體の尊嚴を保つ上に於て、良風習を存する上に於て果して裨益を與ふる幾干ぞや、却りて之を破壊し之を傷くるの恐れなしとせむや

吾人を以て排外思想を有する極めて偏狹者と罵しるものあらむ、罵るものまた吾人より見れば歐化主義、崇拜主義者として最も危険なる思想を抱くものといふべし、吾人は寧ろ定見なく一個獨立の精神なきを歎せざるを得ず、吾人を以て排外者となす、これ吾人を強ゆるの甚しきものにして敢て辨明の必要を認めざるなり。

顧みて我國現下の状況に到れば撫然として長息せざるを得ず、教育の根柢甚だ深からず動もすれば動搖を來さんとす、宗教の要素缺乏を告げ、信仰の基礎未だ鞏固ならず一たび暴風吹き起る毎に動搖甚しく、千浪萬波、怒濤澎湃として岸を打ち巖を嘯むの奇觀は遠く太平洋の彼方より滔々として我國の思想界を縦横に攪亂し無盡に吹荒さんとする危険の最も甚しきものと謂ふべし、

吾人は他人の非行に向て窮追するを好まずと雖も、今回の不敬事件は實に思想界の爲め國家の爲め由々敷事柄なりとす、吾人は不敬漢の基督教信者なるの故を以て之を攻撃するにあらず、歐化主義、崇拜主義を把持するの結果遂にかゝる狂者を出したることを悲むものなり、常に我思想界をして動搖せしむるものは實に危険なる自由思想を有する彼等にして、吾人の愛ふ所茲にあり、忠君愛國に向て疑問を挟み暗に不敬漢を辨證するものあるに至りては、吾人の遂に黙過すること能はざるなり

◎修養 流長ければ則ち竭き難く、抵深ければ則ち朽ち難し、今の宗教家は社會の改善を絶叫し頻りに宗教勸興の機を

促すと雖も、滾々たる修養の源泉なくして、焉ぞよく其目的を達することを得むや、宗教の刷新、社會の改善目下實に焦眉の急を要するものあり、然れども修養なく經驗なき宗教家が如何に咆哮呼號すとも、之が重任を双肩に擔ふてよく立つことを得べきか、宗教の刷新を計らむとせば先づ宗教家自身の修養を勉めざるべからず、社會の改善を促さんとせば宜く其れ自身の品位を高めざるべからず、宗教の刷新、社會の改善最も至難の事に屬す然れども刷新や改善や要は只個人への修養を行ふにあり品位を保ち精神を深くするにあり、必ずしも偉人の出現を俟ちて而して後期すべきにあらず、宗教家たるもの何ぞ修養を怠るの甚しきや、今日宗教家の病源は實に修養の缺乏にあり、是が病源を根治せずして猥に宗教界の刷新を叫ぶが如きは其行爲狂者と毫も違ふ所なき而已、

世人は修養の難きを嘆ず、固より修養は一朝一夕の爲し得べき所にあらず然れども、修養をなさんと云ふものは已に修養の初歩にあり、修養爾く難きものならむや、只修養の難きを思ふて修養の道を歩まざれば何時か能く達しよく教界の刷新を行ふべきや、深く顧みる所なくして可ならむや

◎新聞紙と罪惡 吾人は言論の自由を貴ぶと共に、何人にも思想の束縛を受くることなし、吾人は言論の自由を有するが故に吾人は徳義上其責任を負はざるべからず、然るに社會の耳目を以て任じ輿論の聲を以て誇る新聞紙にして、右手に善をす、左手に惡を教ふるが如きは、社會の秩序を亂し

風俗を害する甚しきものと謂ふべし、新聞紙を以て一個の營利機關となし、大言壯語を放て他を罵り、猥褻なる事柄を掲げて頻に世の好奇心に訴へ只賣高の多からんことを冀ふ、陋もまた其哉、近刊「日本人」は理想の新聞紙と題し米國の教師某が一書を著し基督は如何なる新聞を發行すべきかとて、其理想に關する意見を掲げて紹介せり、試みに「日本人」より借り來りて再び紹介せん哉

- 一、基督は如何なる工合にても、苟も悪き、粗野、若しくは不潔さもないふべき一文を以て一語を其の新聞に載せしむ
- 二、彼が新聞紙の政治欄を増設しては、黨派には屬せざる非政黨的愛國主義により、國民の安寧を先とし、正義を基礎とし、某々黨派の最大利益を目的とするとはなるべし。即ち政治問題を論ずるには、常に神の王國を以て地球にて行はれしめ榮えしむべき方針によるべし。
- 三、彼が發行する新聞紙の目的は神その意志を成就するにあるべし。金を得ん爲にもあらざる、政治上の勢力を博せん爲にもあらざる、自己の新聞紙によりて神の王國を求めんと試み居る意志を其の讀者に知らしむるが最大第一の目的なるべし。此目的を正確明瞭に標すると、教師、宣教師若しくは他の神の爲に身を捨てし者一般なるべし。
- 四、疑ふべき廣告を載せざるべし。
- 五、基督が其の新聞社員に對する關係は最も愛的の者なるべし。
- 六、基督が編輯人たる新聞紙は、其の紙面を多く基督教界の事業に費さん。
- 七、彼は飲食場(サロオン)をば人間の敵、現今文明の不用物として力を極めて攻撃せん。之をなすに於て、公衆の感情如何を顧みる所にあらざるべく、之が爲に讀者の減少なるが如きは勿論念頭に置かるべし。
- 八、日曜には發行せざるべし。
- 九、人が知るを要する新聞を印刷すべし。野蠻なる懸賞擧開、罪業の長々しき罪事、家族に對する誹謗、此類書中の第一義と矛盾する者は、すべて知るを要せず發行せらるべからざる者の中なり。
- 十、基督は現今存在する新聞紙の方へ用ひべき金を有しなば、最善最強の信者をして投書の事に共同盡力せしむべし。
- 十一、如何なる事件の必要ありとも、大主義は常に地上にて神國を建つるにあらざるべからず。此大主義よりして他の細事は判り出さるべし。

新聞紙には一切の特許附屬業の廣告を載せず、警察種及誹謗に類する種は凡て排斥するの項目其他十數條を記されたり今は之を略しぬ、要するに一基督教に關する新聞紙なりと雖も、我國の如く理想を滅却し徳義を無視する現今にありては、由りて以て參考に資するあらば其効決して尠しと謂ふべからず

◎外人の教育思想 過般仙臺市に開會せる奥羽北海道聯合教育大會の席上に於て米國博士デフォレストと云ふ人内地雜居と教育と題して左の演説を試みたり亦以て彼等が懷抱する教育思想の一斑を窺ひ得るのみならず其影響の及ぶ所を卜するに足るなとせずし左に之を掲げむ

教育家は語學を研究するの必要あり言語の不通よりして戰役を起せしは英清の阿片戰爭なり日本國もペルリの來朝に際し通譯官ウヰリアム氏なかりせば遂に不幸の慘劇を見たりしならん戰役なくして萬國と交際するを得しは世界中會て有らざる所にして亦日本の幸福なり左れば日本は大學校創設に先ちて七箇所の語學校を設けたりペルリの日記中當時幕府との談判に就て「日本はどの噓言者はなし」と記せり今や其弊なし某外人横濱より瀛車に搭せ誤つて棚上の物品を同車者の頭上に墜落し謝辭に窮して生覺之の「有りがたう」を以てせり言語の通せざる程困難なるはなし内外人懇親會の如き木像の寄合にして實は困難會なり目下日本に在留せる外人は五千人に及べり其中六百人は基督教信者にして其三分一は日本語を學ばず商人の如きも日本語を知る者少し日本語は實に鎖國的國語にして尤も六箇敷き國語なりペルリの譯官ウヰリアム氏曰く

「日本語は支那語より十倍百倍千倍萬倍も六箇し」と日本の中學校百箇所に對して洋語傳習の爲めに洋人を雇入るゝもの僅かに十五人にして北以北の校舎に雇入るゝは僅かに二人なり他國との交際を盛ならしめんとせば洋人の語學教師を雇入るゝに吝なるべからず交際は學術に伴はずして道德に基くもこのなり「忠孝」の二字は今日に於ては道德の「いろは」なり「喜怒色」に現はさず「は予之を馬丁に打擲されし馬匹の顔色に見たり要するに情の力を能く教育するを主とす日本は宗教に冷淡なりとの評あり信長秀吉家康時代に於て能く宗教問題を處置したりしならば日本國の文明は今日に止まらざりしものあらん日本の宗教は學校以外なり然れども宗教の信仰は憲法の規定によりて自由なり已に明治元年二月の勅語にも「智識を世界に求む」とあり教育の淵源實に此に存す聖書を持たざる教師は他國に對して義務を怠るものなり智識を世界に求むる以上は西洋文明の基礎たる洋語を知らざるべからず人は靈物なり物價に偏して神靈を忘るゝ勿れ

◎奇僧 府下王子村阿彌陀堂の番僧に三光線覺道といへる五十有餘の老僧あり元小石川傳通院の炊夫を勤めたるものゝよしにて目に一丁字なきも信念の堅固なる口に寸時も念佛の聲を絶たず彼は魚獸を食はず五穀を食はず煮たものを食はず焼たるものを食はず夜は點燈せず冬期も火に近寄らず湯を飲まず茶を飲まず鹽類を食はず病むる藥を口にせず食物は野菜と云はず雜草と云はず木の芽と云はず道の傍にあるもの人より施されたるものは喜んで之れを食ひ衣服は古着をもらひ受

けて之を着し又彼の職業は墓地掃除と其近隣の家々を廻りて回向讀經する事なり此職に向て人々一二錢を施すもの積んで毎月五六圓より十數圓に至る而して彼は悉く之を貧民に施し之を赤十字社に寄附し東京市養育院に寄附するを以て唯一の樂みとなすと澆季の世洵に殊勝の奇僧なる哉

◎時間の嚴守 中央風俗改良會長西郷侯爵より頃日大文部大臣に向て、時間嚴守の良慣を養成せられんとを建議し、先づ全國各學校の管理者及教員に於て生徒をして之を實行せしめらんことを以てせりと云ふ、時間を嚴守せざる國民は規律なき國民なり、規律なき國民は放恣怠惰の國民なり由來我國民は時間の消費を惜まず、會て約束の時間を確守したることなし、日に煩瑣として進み行く競走の社會にありては何事も規律正しく、約束の時間は確に履行するの美風を養成せざるべからず、時間は金なりと云ふよりも吾人は吾人の規律を正くする上に於て時間の確守をすゝめんとせざるものなり、知らず改良會の建議果してよく其効を奏するや否や

◎師範學校の増設科目 先般來師範學校々長會議に於て法政經濟の二科を増設せしとの議論あり從來師範學校に於て修身科の一部として帝國憲法の大意を教授し來りたるも將來の日本に於ては單に憲法の大意のみを以て満足すべきにあらざる民法刑法殊に親族法は日常の出來事に遭遇する場合多し山村僻地に於て婚姻養子相續等の問題起るときは先づ之を小學教員に就て聴くと云ふが如きは人の常に見聞する處あり次に經濟科に至りては現今實業教育の聲盛なる時に於て其

必要なるは云ふ迄もなしと云ふの意見合同し夫々答申したるが中等教育に法律科を加ふべしとの議其筋にも起り居る時なれば文部省に於ても遂に其意見を採用するに至るべしといふ

雑 録

北遊雜記 (上野青森間汽車中)

本多 高陽

三月の末家に不幸があつて面白くなくて引籠て居たら、先月の初に至りて、一の事件が起つて北海道の方へ行かねばならぬ様になつた、鬱々と家にばかり隠居して居るよりも却て夫れも面白からうと、四日といふ日上野の櫻は最早二三分通つて、笑を含んで袖を引き留める様であつたけれど、エト五月蠅い花も月も心がらだ、着飾る美人を見ても、酒樽を擔いで浮れてる人物を見ても腹が立つ様な時に花が何に面白いものかマア夫よりは鹹い海でも渡りて蝦夷が島へでも行て来やうと上野から汽車に飛び乗た、是から汽車の中で見たこと、聞いた事、思つた事など何くれとなく書き付けて見やう、同じ箱の中に這入て居て、二條の鐵路の上を引張られて行くのであるけれども、東海道の汽車に乗て居るのと、奥羽線に在るのとは、感情が違ひ、同じ奥羽線に在ても去年乗たと今乗たとは亦境遇も感情も思想も違ふのは、可笑いと云へば可笑いし、當然と言へば當然か、何にしる旅へ出れば又旅の氣になつて家の事などはモ一すつかり忘れて仕舞た、上野を出たの

が午後の四時であつた、浦和大宮邊までは乗合の乗客も多く、停車場毎に乗り下りたりも劇しく、例も新たに乗込んで来る客は先に車中に在る人をドンナ奴が居るかといふ目付で睨め回す、古く居る者は新乗客を何な人かとい整に其顔を見上げる、マアソナ事を繰返へして居て別に話といふも無つた、大宮を過ぎてからは日は段々暮れて来る乗客は下りる計りで乗る人はない、トト唯の三人残された、車中もランプが点せられ、車外は眺を失ふ、ううなる車中の人も自然と親しくなり誰れ言ひ初るとなく、三人の間に四方八方の話が起つて暫くは寂寥を破た、三人の中一人は桐生の絹商人で、一人は仙臺の人で或る會社の重役であつた、話の中には面白い事もあつたが、三陸海嘯の時一家十人の家が九人死んで仕舞たといふ事に付て詳しい話を聞いたが、随分憐れに感じた、栗橋驛を過ぎてからであつたが、桐生の人にはモ一御別れせねばならぬが私はコーいふ者なりとて名刺を呉れた、うこで仙臺の人も僕も共に、名刺を出して交換した、今茲にうんなことといふも耻しい次第であるが、兎に角僕の名刺は文學士何某としてあつたので又一の種子となつた、僕の生國を尋ねてから、貴下の國は人物が多いとか學者があるとか、私の國は何にもないとか卑下するのかわと思へば、唯中島工學博士大槻文學博士がある位の者なりと仙臺の人が言へば、桐生の人も相槌打て私共の地方よりは唯黒川博士が出でたるのみ貴下は御存じかといふ様に謙遜か自慢か知れぬ話が一時又賑はした、之を見ると人は何歳になりても稚氣は抜けぬものと見ゆる、小

山驛に至れば桐生の人とは別れて愈々仙臺の人と二人になつた、ソシテろろく睡魔が襲ひ來た故、互に横になりて眠に就た、夜中目を覺まして見れば唯汽車の走る音と仙臺の人の鼾の聲とのみを聞いた、大方僕の知らずに眠て居た間には仙臺の人も同様の境遇に居た事もあらう、仙臺へ着いたは夜の明け方であつた、連れの人は下車する僕も下りて顔洗ひ辨當を食した

仙臺から先は唯一人となつた、盛岡まで百拾貳哩の間は一人ポツチで引張られた、一室占領して自由勝手な事が出来るから安氣は至て安氣なれども、淋しくて困つた、そうく、眠ても居られず欠ばかりして居た、盛岡以北は益々乗客が少いから、列車の半數程を減じた爲、僕は乗り換へて前の方の大きな室へ行たら、此所には五六人の乗客が有たが、例の又暫くは皆だんまりで有た、盛岡から北へは大分氣候が違ふと見えて遠い山々は勿論眞白だが近い路傍の田島もまだく五六寸から一尺位は雪が積りて居る、殊に景の善いのは岩手山である、南部富士の名に背かず、三國一の名山其儘である、形容したら矢張白扇倒懸でもいふより外に仕様が有るまい、一つ感心したのは中山驛で有たと思ふが、土地の名望家とでも言はれうな人々が二十人餘りも、停車場へ送られて来て丁寧挨拶する、送られて行く人は、四十歳前後の人で細君と十一二歳の男兒とを伴れて居た、衣服で判断するのは宿屋の番頭めきて罪の深い話なれど、有體に白状すれば、親子三人の粉装より察して、左のみ貴いとも富で居ることも見受けられ無つた、

警官が澤山送りて来て居るのを見ると警部でも有らうかと思はれた汽笛一聲にて左様なら左様ならと名残の言葉を残して多勢の見送人に袂を別らし此親子は福岡驛にて下車した、聞て見れば、多年中山町に在勤した巡査が福岡へ轉任したので有たソナ、他縣から來て居た巡査の轉任夫も僅隔り居る土地へ行く巡査を見送るに盛な事、見送られる巡査も名譽であるが、土地の淳朴な事も想ひやられる、是から後は雪は益々深くなる、雪除けの箱トネルを澤山越した、寒地の事情に詳しく人には何でもあるまいが、僕の様な初めて者には珍しく感じた、併し最早歸途には夫程に思は無た、全く經驗の有無に由て感情が違ふのである、津輕富士も有名であるが、汽車中より見ては方面が悪いとの事にて、あまり眺めも宜敷いとは考へなかつた、汽車中の旅では宗教がドーとか、人情が何とか言へる事では無いが、去りながら、寺院らしき建物を頼と見受けぬのと僧侶らしき人との乗合はぬのとは北國邊を旅行するのは確に相異の點である、中尊寺瑞巖寺等勿論名刹には違ひ無いが、其土地の飾とはならうが、佛教の爲になるだらうか、聞けば無能寺貞傳寺など大刹があるソナだ、各莫大の土地を所有し其寺の歳入の多きは驚くの外無しといふ事だ、併し斯ういふ金満家の寺は布教の熱心が少い様だ、兩館には一日滞留した、市街といひ入口といひ先づ仙臺市と伯仲の間にある土地と思はれる、併し流石五港の一だけありて繁華は仙臺の上に出るであらうか、宗教上の觀察を述べたいが、ドーモ宗教などといふ事は何か格段の日にでも遭遇

すれば格別、平生では中々一寸見ても知れぬから、まわ開いた所を照會せよう。

寺院教會學校 此三つは函館に在りて餘程關係を持て居る、此地に拾數個の學校があるが、宗教家の關係して居らぬ學校といふは先一校も有まいといふ事だ、大なる寺院大なる教會では必ず學校を建て、持て居る、道立公立の學校には僧侶が教員となりて住み込んで居る、ソレいふ具合だから何か一つ學校を所有して居らねば宗教界で對等の交際も出来難い有様であるから、從て種々の學校が開けて居る、女學校の多い事は全國に其比を見ぬ程である、小學校も宗教者の私立にかゝるのほ少くない、其他貧民學校もあれば、舊土人をもみ教ふる學校もある、殊に佛國教會の如きは一學校に年々資本を二萬金づゝ費し居るとの事、此校は甚だ整頓して居るといふ事だが、其筈である、斯様に宗教者が教育に力を入れるといふは甚だ結構なる事で、余輩は大に喜ぶ所である、夫で宗教の勢力はドンナであらうと思へば東本願寺別院の報恩講などには其群集は非常なもので、御堂計りでなく、構内は人山を築くといふ事であるが、仔細に觀察すると、全く近郷近在の人や、區内の翁媪のみで、青年中年而も有方家名望家等は一向立寄りぬといふ事だ、残念では無いか、宗教家が斯くまで教育あせに勉強して居りながら、而も斯る残り多き有様なのは一體ドウいふ譯であらうか、僕は唯一日居たばかりで學校等を一々參觀する暇も無かつた故、勿論適切な批評は出来ませんが、此地の宗教家のみならず、一體佛敎家の仕事は精神が無

い様だ、教育をして一向佛敎家の教育として一見識別し得る特色は何にも無い、佛敎者の御蔭で教育せられた者が一人前になると、忽ち佛敎の事を悪口するといふ有様である、函館の僧侶達も矢張此通弊に陥りて、唯物質的に物を施すとか事を教へるとかいふ精神の無い仕事を爲して居るからの事ではあるまいか、一種いふべからざる温味といふもの、禪宗の法門でなければ以心傳心に貧民を救へば富豪も其親切には涙をこぼし、子女を教育すれば父兄も其恩に感激する、病者を救へば健康者も慈悲に咽ふといふ様になる程の妙味が無いからだと思はれる、一方で施與せんが爲には、他方に無暗に寄附を責るといふ様では、仲買人同様で難有味も無いのであらう、此處の所は今の佛敎家諸君に篤と御熟考を煩はし度いのである。

雲水雜記(七)

久保猪之吉

◎高橋白山翁は漢文を善くし漢詩を善くし玉ふ、令忠作術氏が法科大學に在りて夙に文名を轟したりしも以ありといふべし。翁は又晩年に至りて國歌に志をよせられその草稿を示さる。而して詩々予に問ひ玉ふに文典の事歌調の事を以てせらる、翁の胸襟の洒々として學を好み玉ふの厚きに驚きたり。

◎予が白山洞畔に居を移すや翁賀詩を寄せ玉ひき。その轉結に他日訪君君當笑、白山社裏白山來。とその後音信絶え玉はず。信毎に敬服にたへざるは疑はしき假字遣ある時は二

つを並べて書きおこせ玉ふが常なり假令ば堪といふ字にはたえとたへと書きてうの誤正をせ玉ふ。かの青年習養の時代にある人々がうの誤謬を蔽ふに僻論を附するが如きに比ぶればその差異幾許ぞや。

◎聞説、一日翁を知るの巡査あり、翁を訪ひきと、翁彼に問ひて曰く君が職分と大臣といづれか貴きと、查公平身していふ、大臣の如き到底卑賤の及ぶ所にあらず、高下の別は火を踏るよりも明なりと、翁聲を厲して曰く咄、何ぞ身を卑むるの甚しきや、試みに外装を捨てし並びたりとおもへ、何れか高何れか下との別あらむ、等しき天賦の生靈を有して相譲るべからず、人に貴賤の階級あるを譬ふれば山間に倒れたる木材の如し、一人の工匠あり、中の數本を携へて歸れり、かの木材は工匠が手に彫られ刻まれて貴人の床に上れり。しかるに翌日一人の老婆あり山間に入りて工匠が殘しおける木材を籠にして歸れり。而して彼等は下婢の手に渡されて火中に投せられたりといふ。人生の幸不遇は此の如く人爵も人位も此に似たり。苟も良材たる事をえば火中に入るも床上に登るも何ぞ問ふ事を用ひむや。唯だ自らの品性を高めろの身を卑しむことなけれ云々。これ予が同地の知人より耳にせし所也。

◎予嘗て英國に遊びし人に聞けり。彼國の兒童河に釣するものあり小魚を得れば必ず水中に投じて顧みずとある人その理由をどひしにかの兒答へて曰く成長せしめてより取らむと、その人此答を聞きて嘆するもの久しくうの大國の後嗣

たるに耻ぢざることを賞し心中吾國同胞の公其心に乏しきことを深く耻ぢざりとか、予翁に語るに此事を以てせり。

◎翁膝を打つて曰く、然り、吾國人に欠乏する所は實にその點にあり。されば予が師範學校にありて倫理を説くものゝ點に注意せりと、又曰く、西洋の諺に抛けたるものゝ後を見る勿れと、彼國の道德の基は其所にあり、されば慈善をするもその報酬を求むるにあらず、利益をえむが爲めに義捐を爲すにもあらず、唯良心の要求に應ずるのみ大いに吾邦の省みるべき所也云々。

◎曰く征清詩史、曰く白山樓詩文鈔(八卷)これ等は翁の手に成る所のもの、而して歸路翁の餞し玉ひし所のものなり。此を繙く時は翁の風采髣髴として現れその尋常弄文家の比にあらざるを知るべし。翁征清詩史に序して曰く。凡物有根本而枝葉生、國民愛國之誠者國之本也、本已完矣、何患於其末之不繁盛乎、養以緩時而已矣、……命曰征清詩史傳之家庭使我子孫日夕諷誦如置身於苦戰間而存愛國之念焉亦自養本之意也……

◎卷末に告子孫と題して 至誠只合答 皇恩、愛國心開富強源、 試看忠士征清績、 日本隆興新紀元。

◎翁や實に信州の名物也。年齒六旬を越えつらむか頭髪は既に二毛。顔色衰へて皮膚弛緩せり、綿を被りて夏尙寒を覺ゆといふ。かの青山迂齋におくりし書中に弱冠患瘵疾灸藥七年柴毀骨立、每爲父母之憂とあるは眞なるべし。されどその辨舌の壯快にして盡さざる氣宇の巍然として昂れる壯者

も及ばざる所のものあり。かつや令惠皆匪勉光ある未來の横はるあり、されば翁の眼中何と無く星の輝あり。

◎歸路翁にのこせる國歌數多あり。

歸りなば父にも見せむ給はりし

君がてゝろの書の巻々。

更科の月も何せむ明らけき

君がをしへを一夜さかばや。

かくて更科を廻らむとおもひし時間翁の許にて費しつ

◎瀧車川中島を貫きて北越の地に向ふ時、左方遙かに古刹の

見ゆるあり、心に善先寺なるを期せり。

亡き祖母のねものがたりによく聞きし

川中島をけふ見つるかも。

と詠せし其祖母が心願し乍ら參詣を果さざりしは此寺なり

けり。予が祖母といふは念佛宗の信者にして寺詣等怠らざ

りき。されば予も小學に通ひそめたる年頃よりそのみ供し

て授戒式や法話やなどへ臨みし事もあり。かの善光寺の屋

根をのぞみて

一度は息の内に誓へりし祖母

いまさぬがうらみなりけり。

◎歸路かの寺に詣でし御札もうけ戒壇廻りをまなしつるは

かゝるいはれのあれはなりけり。

むまご我彌陀のみ前にぬかつきて

まをす願もなき祖母のため。

亡き祖母に聞かせまつらむ由もがな

あみだ如來にけふまるでつと。

亡き祖母にあふよしあらば常暗の

此めぐり道嬉しからまし。

亡き祖母に逢ふ事もやと戒壇を

二度三度めぐりつるかな。

◎予が宿れる山口の君に福々したる祖母の君あり。やがて米

の壽にも達し玉ふべしと。極めて佛の信者に見へたり。種

々の昔話をも爲し玉ふ。いよく亡き祖母の事忍ばれて

悲し、樹静ならむと欲すれば風やますといふ事今更のやう

なり。

◎いよく歸京といふわしたるも別を惜ませ玉ふ。山口

の姉君も妹君も歌等短冊に書きておこせらる。

常しへに忘れざらむと信濃路の

野邊の秋秋色あさくとも。

かへしはせしかぞわすれたり、かの祖母の君涙くまし、再會

期しがたしなさいはるも物悲し。佐渡より持ち來りし無

名異焼の茶碗あり、その箱に一首を記してとくめおく。此焼

物は壽をのばすとの言傳也。

朝な夕な此陶物を御手にして

長き齡をへませとぞおもふ。

◎人の情より情の間を歴遊して樂しき旅は終りたり。予が眼

中に蛇はあらざりき、予が心中に毒は來らざりき。かの日

蓮上人が心をしておきて十方法界物無しといひけむるげにお

もはれたり。旅行日記の終末に國歌一首を跋す。

鬼をしておのが心にすませずば
世の人皆は佛ならまし。

(畢)

信 界

満足の心

清澤滿之

吾人には満足するに云ふことが必要である、不満を懐くほど苦しいことはない、又不満は見え隠れしたものならぬ、世の中の争闘や苦痛は大抵不満の念が根本である、然るに世の中にはいふ人がある、人間に不満の念がなければ奮發も勉強も何もしない様になると云ふ人がある、つまり人間が盛に活動して幸福に進むのは、常に現在の有様に満足せずして不満を懐き、其不満を満足せんと希望するが爲に活動するのであると云ふのである、なる程一應尤な様であるけれども、此の如く云ふのは、満足不満と云ふことを思達して居るのである、満足不満と云ふとを絶望不絶望と云ふとに誤解して居るのである満足不満と云ふとは現在の有様に就て云ふとである、絶望不絶望と云ふとは未來の有様に就て云ふとである、現在に就て満足して居ると云ふとは未來に就て絶望して居ると云ふとは、現在に就て不満足して居ると云ふとは未來に就て絶望して居らないと云ふとは、寧ろ反て現在に就て満足して居る者で未來に就て充分の希望を持って居る者がある、又現在に就て不満を懐て居る者で未來に就て大に絶望して居

る者がある、故に奮發とか勉強とか云ふとは寧ろ満足して居るものに盛なることでありて不満を懐て居るものには反て盛でないことであるからして奮發とか勉強とか云ふに就ても吾人は満足心を修養せねばならぬ、然ればドーしたならば吾人は現在に就て満足することが出来るであらうか、満足心を修養する方法はドーしたならばよいかと云ふに天地間に真理の支配があると云ふとを信するが最も近道であると思ふ、大体吾人の奮發勉強するのは、知らず識らずの間に、此事を信じて居るのである、種を蒔けば、芽が出来、苗が出来、實が出来、種になる、ソコには動かすべからざる法則がありて断へず動きつゝあることを信じて居る原因あれば結果がある、結果があれば原因がある、因果の真理は天地萬物を貫き支配しつゝあると云ふとを信じて居るのである、天地萬物を貫きて真理が支配しつゝある以上は、吾人が過去より現在に至り現在より未來に至るには、常に因果の真理に支配せられて行くものである、原因結果の理法と云ふものは外物ばかりを支配して居るのではなく、吾人の動作が悉く此理法の爲に支配せられて居るのである、然れば吾人の現在の有様はトへ如何であらうとも、吾人の過去の原因よりして必然的に結果したるものであると満足せねばならぬ、之に對して不満を懐くは愚痴と云はねばならぬ、人々が愚痴を止めて各々の現在の有様に満足をするのは、所謂分に安んずるといふとである、吾人には分に安んずることが必要である、然るに分に安んずると云ふことを嫌ふ人がある、シカシ其意は前の満足と云

ふことを嫌ふのと同じことである、分に安じては奮發勉強をしない様になるからわらうと云ふのである、其考へ方の誤れるとは前に陳べた通りである、シカシ此序に此の如き誤解の生ずる根本的理由を云へば、大体因果必然と云ふこと、心意の自由と云ふことに就て一大不可思議の存するが故である、必然と云ふこと、自由と云ふことは兩立せざるとである、單に此二つを並べ立てて見れば、折れ合ひはつかないことである、哲學上では常に大議論である、然れども實際に於ては、吾人は常に此二つの間に挟まれて居る、これがコーである、吾人は時の上に於て過去現在未來の三つを認る、其中現在の關係が二つ立つことである、過去に對する現在と未來に對する現在とである、此が則ち現在に必然と自由とを總合する所以である、乃ち過去に對する現在に必然の現在であるが未來に對する現在に自由の現在である、一つの現在に二つの關係があり、必然と自由とを總合して居る此状態が吾人の現在の上に行はれて、一方には過去の結果たる現在としては、吾人は其に満足せねばならぬ、けれども又一方には未來に對する原因となるべき現在としては、吾人は其處に奮發勉強の心を起さねばならぬ、而して實際には、本統に能く現在に對して満足が出来れば未來に對して本統の奮發勉強の心が喚起さるゝとである、然るに此満足と安心と云ふことは、一應は上に述べた通り、過去の結果と見て現在の事の必然動かすべからざることを覺悟するより出て來ることであるが、更に他の道より考ふれば今一層趣味のあることである、

ある、大體吾人が事に満足することを得ないのは事物の真相を知らぬから起ることが多い、執着すべからざるものに執着し、欲望すべからざるものを欲望するが爲に満足が出来ぬことが多ひ、よく其事物の真相が分りて見れば、最早執着するに及ばぬ、欲望するに足らぬとなる、執着と欲望とが停止すれば、現在の有様で充分である、決して不足はないと満足が出来ることである、此の如くして満足を來すのは餘程興味が多ひことである、特に奮發とか勉強とか云ふことを重んずるものには、此方法が勝れて感ぜらるゝとである、固より過去の結果と諦むるにも奮發勉強も入るとではあるが、自分の執着心や欲望心を制するには奮發勉強を要することがよく分るから勝れて感ぜらるゝのである、昔から克己と云ふことが盛に唱へらるゝのは此故である、特に又此方面より云ふ時には満足と云ふことが過去に對する結果的必然的事たるよりは、寧ろ未來に對する原因的自由のものと感ぜらるゝ所がある且つ段々奮發して勉強して満足の道に進まうとする勇氣が生じ易ひことである、此が中々興味多きことである、此點より見れば満足すると云ふことは決して消極的のことではない、頗る積極的のことである、吾人に不満と云ふことがなければ奮發勉強が出来ぬと云ふのは大なる間違ひである、吾人は満足の上から奮發勉強をせねばならぬ、満足のことを修養するは甚だ大切なることである、

●正誤 第參拾號社説第十一行 法池房證空は實地房證眞の誤植

會 報

◎會頭久我侯爵九州巡回記事 豐前中津

●演說會 行橋を去りて午後三時中津着、直に會場寶蓮坊に至る、堂の内外凡て人ならざるはなし、無慮二千餘人、外なるは天幕を張りて天日を蔽ひ、演壇は様の直内に据えられたり、草野祐信氏開會の趣旨を述べ、常盤文學士は佛教徒の面目を發揮せんとするものは報恩の行業を疎にすべからざる旨を説きて一時間を演了し、最後に同地有志の設立にかゝれる扇城女學校の美譽たるを祝し、共に之を翼賛して其趣旨を貫徹せられん事を望み、最後に久我會頭は同盟會の趣意を述べて、賛成せられん事を乞ひ、參聽者一同頗る満足の面色を現はせり、●茶話會 演說會後直に旅館長春園に於て、茶話會を開く、來會者は地方有志、僧侶、信徒合計五六十名村上徳氏の發議によりて、九州佛教徒同盟會は毫も異議なく組織する事に決し、久我侯爵の挨拶あり、和氣霽々の間に散會せり、同會の規則は左の如し

九州佛教徒同盟會規則

- 第一條 本會ハ九州佛教徒同盟會ト稱シ本部ヲ久留米市ニ置ク
- 第二條 本會ハ教學ニ關スル時事ノ問題ヲ講究シ佛教ノ光輝ヲ發揚スルヲ以テ目的トス
- 第三條 前條ノ目的ヲ達スル方法トシテ各地ニ於テ時宜ニヨリ講義演說若クハ説教ヲ開席ス
- 第四條 本會ハ本會ト目的ヲ同クスル全國ノ團體ト氣脈ヲ通シ歩調ヲ一ニスル事
- 第五條 本會ハ九州各地ニ地方部ヲ置ク
- 第六條 但シ地方部ノ規則ハ各地ノ状況ニヨリテ之ヲ定ム
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 幹事若干名一地方部ヨリ一名宛撰出スルモノトス
- 計議員若干名各地方ニ於テ僧俗ヲ問ハス一名乃至三名宛撰出ス
- 幹事ハ本會萬般ノ事ヲ處理ス

- 第八條 本部ノ常務ハ本部所在地ノ幹事之ニ當ルモノトス
- 第九條 但シ必要ノ場合ニハ書記一名ヲ置クモ妨ケナシ
- 第十條 計議員ハ本會重要ノ件ヲ議スルモノトス
- 第十一條 本會ハ一年一回本部ニ於テ評議員會ヲ開クモノトス
- 第十二條 本部ノ常務ニ當ル幹事ニハ應分ノ手當ヲ支給スル事アルヘシ
- 第十三條 二會議等ニテ出張員ノ經費ハ各地方部ノ負擔トス
- 第十四條 本會ノ總意ニ從同スルモノハ僧俗ヲ問ハス入會スルコトヲ得
- 第十五條 ●幹事法玉、末弘開慶、長野寂靜、澁谷圓慶、諸氏なりと成、小會法玉、末弘開慶、長野寂靜、澁谷圓慶、諸氏なりとす、是等有志の存するなり、同地同盟會の將來も希望多しといふべし

●扇城女學校

本年四月八日を以て開校せられたる同地該學校の規則課目の詳細を得たれば因みに以て茲に掲ぐる事となしぬ、佛敎の主義によりて道念を養ひ、品性を作るべき女學校の必要は十數年來志あるもの、皆之を口にし、之を筆にする所にして、而して猶未だ其設立を聞くとなし、是必ず之が組織教育の中心たるべき人士の缺乏に因せるならん、今九州の一片地に此組織を見る、實に空谷梵音の思あり、希くは偏へに其健全の發達を遂げて、他の卒先者たるの任務を全うせられん事を望むのみ、規則課目等頗るくたくしと雖も参考に供すべきもの多かるべきを信するを以て、悉く之を掲載して以て同志者の一察に供せん、

私立扇城女學校入學規則

- 第一條 定時入學ハ毎年四月ノ始メ期日ヲ定メ之ヲ行フ
- 第二條 但シ入學志願者ノ員數既定ノ人員ヲ超過スルトキハ仍ホ試験ニヨリ入學ヲ裁
- 第三條 生徒ニ缺員ヲ生ジタルトキハ臨時入學ヲ許可スル事アルヘシ
- 第四條 入學志願者ハ左ノ書式ニ依リ願書履歷書各一通ヲ差出ス可シ
- 第五條 本科入學志願者ハ品行端正身體健全ニシテ高等小學卒業ノモノ若クハ此
- 第六條 レト同等ノ學力ヲ有スルモノタルヘシ
- 第七條 別科入學志願者ハ品行端正身體健全ニシテ尋常小學卒業ノモノ若クハ
- 第八條 此レト同等ノ學力ヲ有スルモノトス
- 第九條 本科並ニ別科第二年度以上編入志願者ハ試験ヲ施シ學力ヲ査定シ相當ノ

學級ニ編入ヲ許ス
第七條 入學ヲ許可セル場合ニハ左ノ書式ニ依リ保證書ヲ差出ス可シ
(用紙十行紙)

私立扇城女學校 御中
履 歷 書
何國何郡何町何番地
何年何月ヨリ何月迄何學校ニ入り何級迄修業或ハ卒業
種痘或ハ天然痘
何年何月ヨリ何月迄何學校ニ入り何級迄修業或ハ卒業
右父兄若クハ後見人
何年何月生

保 証 書

住所
住所
何某何女或ハ姉妹戸主
何某何女
何某何女
何某何女
何某何女

右之者今般御校へ入學御許可相成候ニ付テハ御規則堅ク爲相守可申ハ勿論退學等爲致間敷且在學中同人身上ニ關スル事件ハ私一切相引受可申依テ證書差出候也

科目	學年	時間
修身	第一	年
國語	第一	年
算術	第一	年
漢文	第一	年
修身	第二	年
國語	第二	年
算術	第二	年
漢文	第二	年
修身	第三	年
國語	第三	年
算術	第三	年
漢文	第三	年

私立扇城女學校本科學科課程表

科目	學年	時間
外國語	第一	年
地理	第一	年
歷史	第一	年
裁縫	第一	年
家事	第一	年
習字	第一	年
體操	第一	年
合計	第一	年
外國語	第二	年
地理	第二	年
歷史	第二	年
裁縫	第二	年
家事	第二	年
習字	第二	年
體操	第二	年
合計	第二	年
外國語	第三	年
地理	第三	年
歷史	第三	年
裁縫	第三	年
家事	第三	年
習字	第三	年
體操	第三	年
合計	第三	年

私立扇城女學校別科學科課程表

科目	學年	時間
裁縫	第一	年
家事	第一	年
習字	第一	年
體操	第一	年
合計	第一	年
裁縫	第二	年
家事	第二	年
習字	第二	年
體操	第二	年
合計	第二	年
裁縫	第三	年
家事	第三	年
習字	第三	年
體操	第三	年
合計	第三	年

◎近角氏の片信 去五月廿五日晚香坡に着しシカゴへ向て出發せむとす、委細の通信はシカゴより發送すべしとの片信漸く去る廿四日着せり、同氏の通信本誌上にあらはるゝ遠からざるべし敢て讀者諸君に告ぐ

(未完)